

# 島根大病院、肝移植を早ければ2024年にも再開へ 1989年に国内初の生体肝移植実施 「山陰で完結する医療提供したい」

地域

ライフ

島根

医療・健康

2023/12/4 (最終更新: 00:11)



1989年に国内初、世界4例目の生体肝移植を実施後、肝移植をしていない島根大医学部付属病院（出雲市）が、肝移植再開の準備を進めている。89年の先駆的な移植後、体制が整わなかったが、山陰に肝移植ができる医療機関がないため、再開を目指す。医師たちの研修などを経て、早ければ2024年から移植手術を開始する。

今年4月、これまで300件以上の肝移植手術に携わった日高匡章教授（49）が長崎大から赴任したのが一つのきっかけとなった。移植に向けて院内で連携するワーキンググループを準備中で、8月に若手の外科医と岡山大で手術を見学。今後、麻酔科医も肝移植を担う施設の見学を検討する。

生体肝移植は、提供者と患者用で二つの手術室を同時に使うため、医師や看護師たち約20人のチームが要る。国内では脳死ドナーが少ないため、まずは生体移植を再開。その後、関連する学会から脳死移植の施設認定を受けて脳死移植にも取り組みたいと考える。

同病院は前身の島根医科大付属病院だった89年、1歳の杉本裕弥ちゃんに父親の肝臓の一部を移植した。当時は急いで手術をする必要があったが、議論が十分に尽くされる前で、倫理的観点から院内外で異論も出た。国内で生体肝移植が進むきっかけをつくる一方、1例目のリスクを負った同病院ではその後、肝移植は行われなかった。

日本移植学会によると、現在は国内で年間約400例の肝移植が行われている。21年末までの累計は1万839例。このうち生体移植1万121例、脳死移植715例などとなっている。

同病院によると、現在、中国地方で脳死肝移植をできるのは広島大と岡山大だけ。日高教授は「移植を必要とする患者に山陰で完結する医療を提供したい」。椎名浩昭院長は「移植医療は難易度は高いが、なければ困る医療。住みやすい地域にするために進めたい」としている。（新山創）



拡大する

肝移植の再開を準備する島根大医学部付属病院（出雲市）

